近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容について

――新たに発見された宇佐美延枝「花精」（1898）を中心として――

勝山　稔

問題の所在

日本における中国の文学受容が古来連綿と行われてきたのは、周知の事実である。殊に古典小説の分野について言えば、大きく二つの潮流が存在した。一つには『搜神記』『李娃傳』に代表される文言小説（志怪小説や伝奇小説）の受容がある。そしてもう一つが『三國志通俗演義』・『水滸傳』・『今古奇觀』に代表される白話小説（長篇白話小説や短篇白話小説）の受容である。小論では、この白話小説の受容に関して多大な貢献を見せながらも、今まで学界にて取り上げられる事のなかった女性翻訳者に注目することとしたい。

中国から日本への小説作品の受容は、中国の伝統的な文章語――文言によって行われてきた。しかし中国では唐代以後、口語表現と語彙を母体とした白話文が生成発達し、明代には白話文を用いた小説が陸続と生み出されることとなった。そのため日本でも江戸時代には白話小説が輸入され、積極的な受容を試みられるようになったが、例えば明治・大正時代から昭和二五（一九五〇）年前後までの期間に於いては、その翻訳作業の主体――即ち白話小説の訳者は、何れも支那愛好者や小説家、支那通等の民間知識人が携わっていたのである。

なぜ本研究で民間知識人に注目したのかというと、明治期から終戦直後に到る期間、日本における中国通俗文学の受容に、とある現象が発生していたからである。その現象とは何かといえば、この時期に大学の専門家の殆どが白話小説の翻訳をためらい、江戸時代から連綿と続けられていた白話小説の受容が停頓状態【一】に陥っていたのである。その原因は幾つか考えられる。例えば中国文学研究における白話小説の地位の低さ、それに伴う研究環境の冷遇、そして翻訳に踏み切るだけの白話小説を正確かつ精緻に逐語訳することができるだけの研究水準に到達していなかったのである。

この状況下で、明治大正時代や戦前の受容を支えたのは誰かというと、中国文化を愛好する在野の知識人であった。彼等は独自の学識で白話小説の翻訳を発表、現在の日本でこれらの作品が深く人口に膾炙される存在となったのは、アカデミズムに由来する研究成果ではなく、実は支那愛好者の尽力に他ならないのである。

そのため筆者は戦前期の支那愛好者の翻訳作業の発掘作業を進めている【二】。殊に、中国通俗文学史の中で重要な位置にある短篇白話小説集・「三言（さんげん）」（『古今小説（ここんしょうせつ）』『警世通言（けいせいつうげん）』『醒世恒言（せいせいこうげん）』）所収篇にお

ける翻訳事例の発掘作業を試みている。そこで小論では、筆者が発見した明治時代の女性翻訳者・宇佐美延枝による短篇白話小説「灌園叟晩逢仙女」の翻訳「花精」（一八九八年七月）に注目し、宇佐美延枝が取り組んだ受容活動の一端を考察し、先行研究の欠如を補完したいと考えている。

一・宇佐美延枝「花精」について

（1）宇佐美延枝「花精」発見に到るまでの経緯

宇佐美延枝による翻訳「花精」は、二〇一八年に筆者が発見した。その経緯であるが、事の発端は、筆者が二〇〇五年に長野県上田市立図書館で発見した菊の家女史訳『李謫仙・蘇小妹』に遡る。筆者は書名が「三言」所収篇の篇名（『警世通言』巻九「李謫仙醉草嚇蛮書」『醒世恒言』巻一一「蘇小妹三難新郎」）に類似している点から資料調査を行ったが、その結果、奥付には訳者兼版権所有者として牛込区東五軒町三十五番地の宇佐美延枝の名があったこと、そして本書の副題が『小説抱甕文庫第壹編』であることから、終戦直後の訳者・辛島驍により存在が示唆されていた[三]『抱甕文庫』であることを確認した。

辛島は『抱甕文庫』を『醒世恒言』巻一一の翻訳で訳者は「宇佐美延枝子」としたが、該書は「三言」所収篇二篇（『警世通言』巻九「李謫仙醉草嚇蛮書」『醒世恒言』巻一一「蘇小妹三難新郎」）の翻訳で、訳者は「宇佐美延枝子」ではなく「宇佐美延枝」であった。また、注目すべきは寧ろ筆名の菊の屋女史である。

一八九八年五月二三日『読売新聞』朝刊第八面には「菊廼屋女史訳　近刊／小説抱甕文庫　李謫仙蘇小妹　洋装美本定価金廿五銭郵

菊廼屋女史譯　近刊
抱甕文庫
李謫仙
蘇小妹
洋装美本
定價金廿五錢
郵税金二錢
發行所　東京本郷區本郷六丁目五番地　哲學書院

税金二銭」と近刊予告の広告があり、その柱の下で「〔略〕弊院幸に出版の栄を得爾後逐篇刊行して之を紹介せんとす」という紹介文が確認される。

奥付の刊行年月日を手がかりに官報掲載の版権登録を確認すると、「著作権登録図書（筆者註・明治）三十一年六月二十三日登録」には、書名と「小説抱甕文庫　李謫仙蘇小妹　著作及版権所有者東京市宇佐美延枝」とあり[四]、翻訳者菊廼屋女史若しくは菊の家女史と著作者宇佐美延枝は、同一人物であることが確認された。

その上で二〇一八年に『抱甕文庫』について再度書誌情報を精査したところ、『抱甕文庫』が刊行された翌月の七月二五日から二九日にかけて「菊の屋女史」なる筆名で『醒世恒言』巻四「灌園叟晩逢仙女」の翻訳である「花精」が『讀賣新聞』に、一八九九年一月には「菊の家女史」名義で「女秀才」同年一〇月に「唐伯虎」が『文藝倶樂部』に掲載されていたことを発見し、翻訳状況の検証の結果、両訳は同一人物の翻訳であることが判明した。

そこで本論では、新発見の訳業の中から『讀賣新聞』連載の「花精」について少しく検討することとしたい。

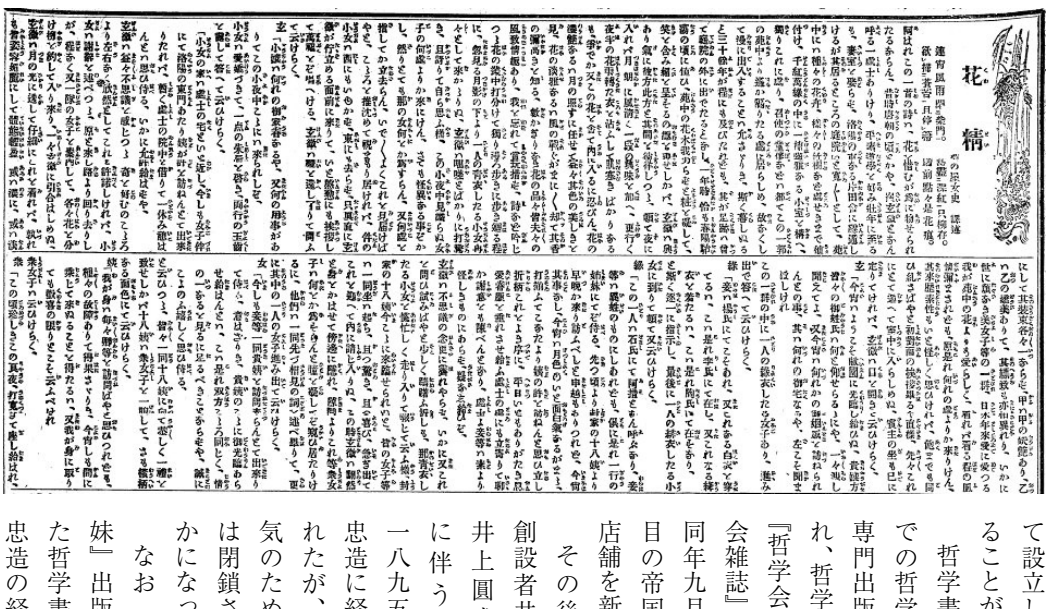
（2）翻訳刊行の経緯について

二〇〇五年の『李謫仙・蘇小妹』発見以来、訳者自身や翻訳の経緯調査を継続しているが、現時点でも不明点は少なくない。現時点で判明している点は、以下の通りである。

訳者について判明している事実は少ない。本書奥付にある通り、訳者兼版権所有者は宇佐美延枝であり、訳者の住所は東京市牛込区東五軒町三五番地とある。この住所は日本に亡命した梁啓超が一八九八年に創立した華僑学校・東京高等大同学校【五】の所在地と番地まで一致する。また翌一八九九年に嘉納治五郎が創設した私塾・亦楽書院は、程なく早稲田に近い牛込区西五軒町三四番地に弘文学院【六】に改名され、官費留学生を中心とした附設の寄宿舎も東京高等大同学校の近隣に存在した。そのため訳者は華僑学校の関係者であり、漢語を母語とする中国人留学生にも近しいとも思われるが、確証までには至っていない。

また、宇佐美延枝という氏名からのアプローチでは、類似する氏名の知識人として「宇佐美延枝子」なる女性が、明治一五年（一八八二年）に金沢女子師範学校の教員として在籍【七】し、その後東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学）附属女児小学校訓導に明治一六年から一七年にかけて在籍【八】していた事実を確認したが、状況証拠の範疇にとどまり、小論における宇佐美延枝と直接の関係があるのかは、現時点では未詳である。

また『李謫仙・蘇小妹』の出版社「哲学書院」についても、二〇〇五年当時は不明であった。しかし、その後井上圓了が哲学書の出版を目的として一八九七年年一月に本郷弓町一丁目一〇番地にて設立した出版社であることが判明した。


花精

哲学書院は広い意味での哲学諸科の書籍の専門出版として設立され、哲学関係の出版や、『哲学会雑誌』『国家学会雑誌』の発行を行い、同年九月から本郷六丁目の帝国大学正門前に店舗を新設した。

その後哲学書院は、創設者井上圓了の弟・井上圓成の実父死去に伴う帰郷に伴い、一八九五年七月に高頭忠造に経営権が譲与されたが、高頭忠造も病気のため一九〇〇年には閉鎖された事が明らかになった【九】。

なお『李謫仙・蘇小妹』出版の契機を作った哲学書院代表の高頭忠造の経歴については

現時点でも未詳であり、出版社からのアプローチには限界がある。

ただ、「三言」所収篇の選集である『今古奇觀』の翻訳を刊行するに至った経緯については、宇佐美による「抱甕文庫自序」[十]で詳しく知ることが出来た。

これについては、既に拙稿[十二]で言及したが、行論の都合からその要点のみを約言したい。

訳者である宇佐美延枝は、東京郊外で三年間療養生活を送っていた。その際、療養先に抱甕老人編の短編白話小説集『今古奇觀』を持参し四〇篇中二〇篇を翻訳したという。その折、哲学書院主人・高頭忠造が宇佐見の見舞いに訪れ、『今古奇觀』の翻訳が話題となった。高頭は宇佐見の翻訳刊行を力説し、公刊に至ったとある。高頭は明治以降の日本近代文学の発展を担った西洋の小説を、今度は中国から求めようとしたのであり、当時の学界の事情に精通していない書肆の勧めが、結果的に翻訳出版を促したこととなる。

ここで注目すべきは『今古奇觀』翻訳の経緯である。「今古奇觀となんいふ小説の四十回ばかりあるを取り出し試に繙きて讀みぬ。件の一書は大方諸彦の皆知り給ふ如く。支那短篇小説の中いとも著名なるものにて。呉中抱甕先生の編輯せしものなり。讀みもてゆくに文意の會得しがたきところあり。又文字など脱落磨滅して讀み得ぬところも多かりけるが。文作る一助とも思ひて惟拾ひ〳〵に二十回ばかりを繙譯せり」とあり、宇佐美は『今古奇觀』の完本を持ち、全四〇篇のうち二〇篇を試訳を完了したとある。また宇佐美は続けて「名をも抱甕文庫を題し一篇より十篇までを刊行することはしたり」とあるように、哲学書院で実際に刊行された点、また翻訳の続刊が一〇編まで企画されていた点からも、二〇篇翻訳の可能性は低くはない。「三言」所収篇の訳者の中で二〇篇以上の翻訳が確認出来るのは、戦前期の支那愛好者である井上紅梅（一八八一～一九四九）まで待たなければならず、短篇白話小説受容史の観点からは、宇佐美の存在は看過できないことが理解出来よう。

なお『抱甕文庫』の続篇についてであるが、現時点の調査では第弐篇の刊行は確認できていない。そのため第壹篇のみの刊行にとどまったと思われるが、「抱甕文庫自序」にある続刊として準備されていた少なくとも八篇の翻訳が存在したこと。そして、その一篇が『李謫仙・蘇小妹』刊行翌月の『讀賣新聞』に掲載されたものと推論できる。

以下、宇佐美延枝による『李謫仙・蘇小妹』及び「花仙」の翻訳、彼女の創作小説「不幸の幸」掲載の経緯を時系列順にまとめると、左記の通りである。

一八九八年四月	菊の家女史『李謫仙・蘇小妹』序文脱稿
一八九八年五月二三日	哲学書院近刊広告掲載（『讀賣新聞』）
一八九八年六月一五日	菊の家女史『李謫仙・蘇小妹』発行
一八九八年六月二三日	宇佐美延枝『李謫仙・蘇小妹』著作権登録
一八九八年七月二五～二八日	菊の家女史「花仙」連載（『讀賣新聞』）
一八九八年一〇月	菊の家女史「不幸の幸」掲載（『大日本婦人教育會雜誌』）

一八九九年一月　菊の家女史「女秀才」掲載
（『文藝倶樂部』）
一八九九年一〇月　菊の家女史「唐伯虎」掲載
（『文藝倶樂部』）

それでは宇佐美の翻訳はいかなるものであったのか。次節で分析を試みたい。

二・宇佐美延枝「花精」の翻訳状況について

『讀賣新聞』に掲載された宇佐美の「花精」は、『醒世恒言』巻四・『今古奇觀』巻八所収「灌園叟晩逢仙女」である。『今古奇觀』は「三言」の選集であり、宇佐美が『醒世恒言』若しくは『今古奇觀』何れかの翻訳であるのか判断が必要であるが、宇佐美が翻訳を発表した当時（一八九八年）では、鹽谷温・長澤規矩也・辛島驍の三氏による「三言」の発見（『改造』第八巻第八号「明代の通俗短篇小説」一九二六年七月）の以前であること。そして、宇佐美による自序の中でも「書筐の底などかい採り。古本雜誌類の中より。今古奇觀となんいふ小説の四十回ばかりあるを取り出し試に繙きて讀みぬ。」とあるので、白話小説の受容史の上から、ここでは『今古奇觀』の翻訳として扱うこととしたい。

宇佐美の翻訳はいかなるものであったのか。『今古奇觀』巻八「灌園叟晩逢仙女」の「入話（導入部分）」の一部を掲げる。唐代の崔玄微は神仙の道を好み、花好きで仕官もせず広い庭の中に花草竹木を植え、その中で暮らしていた。ある春の月の清らかな夜にその庭に美女たちが現れて、玄微を招待して宴会を開いた。女たちはいずれも花や木の精であった。その夜、女たちは風神の機嫌を損ねたが、翌日玄微が強風から花を守ったので、その女たちはお礼に延年長生の花びらを贈った。それを服用した玄微はいつまでも三〇歳の容貌となった。原文では、

青衣稱謝、原從舊路轉去。不一時、引一隊女子、分花約柳而來、與玄微一一相見。玄微就月下仔細看時、一個個姿容媚麗、體態輕盈、或濃或淡、汝束不一。①隨從女郎、盡皆妖艷、②正不知從那裏來的。③相見畢、玄微邀進室中、分賓主坐下、開言道、「④請問諸位女娘姓氏。今訪何姻戚、乃得光降敝園。」一衣綠裳者答道、「妾乃楊氏。」指一穿白的道、「此位李氏。」又指一衣絳服的道、「此位陶氏。」遂逐一指示。最後到一緋衣小女、乃道、「此位姓石、名阿措。我等雖則異姓、俱是同行姊妹。因封家十八姨、數日雲欲來相看、不見其至。今夕月色其佳、故與姊妹們同往候之。二來素蒙處愛重、妾等順便相謝。」⑤玄微方待酬答、青衣報道、「封家姨至。」衆皆驚喜出迎。玄微閃過半邊觀看。

衆女子相見畢、說道、「⑥正要來看十八姨。爲主人留坐、不意姨至、足見同心。」各向前致禮。十八姨道、「⑦屢欲來看卿等、俱爲使命所阻、今乘間至此。」衆女道、「如此良夜、請姨寬坐、當以一尊爲壽。」遂授旨青衣去取。十八姨問道、「此地可坐否。」楊氏道、「主人甚賢、地極清雅。」十八姨道、「主人安在。」玄微趨出相見。舉目看十八姨、體態飄逸、言詞泠泠、有林下風氣。近其傍、不覺寒氣侵肌、毛骨竦然。

遜入堂中、侍女將桌椅已是安排停當。請十八姨居於上席、衆

文挨次而坐、玄微末位相陪。

不一時、衆青衣取到酒餚、擺設上來。佳餚異菓、羅列滿案。酒味醇醲、其甘如飴、俱非人世所有。此時月色倍明、室中照耀如同白日。滿座芳香、馥馥襲人。賓主酬酢、杯觥交雜。酒至半酣、一紅裳女子滿斟大觥、送與十八姨道、「兒有一歌、請爲歌之。」

（青衣の女は礼をいって、もときた道をもどっていったが、しばらくすると一群の女をひきつれ、花を分け柳の枝をはらいのけながらやってきて、一人一人玄微にひきあわせた。玄微は月光の下で仔細に眺めたが、どの女もみな容姿は艶に美しく、ものごしも軽やかで、あるいは濃くあるいは淡く、衣裳はさまざまであり、①つきそいの女たちもみな艶っぽく、②どこからきたのかまるで見当もつかない。

③挨拶がすむと、玄微は部屋の中へ迎えいれて、主客それぞれの席についた。そこで玄微はたずねた。

「④あなた方のお名前は。これからどこのご親戚をお訪ねで、この庭にお立ちよりくださったので。」

すると、緑の衣裳を着た女が、「わたくしは楊と申します」と答え、白衣の女を指さして「この女は李さん」また絳い衣裳の女を指さして、「この人は陶さん」と、一人一人指さして教え、最後に緋色の衣裳の少女まできて、こういった。「この人は姓を石、名は阿措といいます。わたくしたちは姓はちがいますが、みんな同じ一族の姉妹なのです。封家の十八番目のおばが先日来、会いたいといいながらまだまいりませんので、今夜は月がいいのをさいわい、みんなでいっしょに訪ねていくところなのです。それにまた、平素あなたに可愛がっていただいておりますので、わたくしたち、ついでにお礼にまいりましたの。」

⑤玄微が答えようとしたとき、侍女が、「封おばあさまが見えました」と知らせた。みんなは大喜びで出迎えた。玄微は傍らに身を避けて見ていた。

女たちは挨拶がすむと、「⑥これからおばさまをお訪ねするところでしたの。ご主人にひきとめられていたら、おばさまがいらっしゃるなんて、心が同じしるしですわ」

といい、それぞれ進み出て礼をした。十八番目のおばが、「⑦いつもあなた方に会いたいと思いながら、お役目のためにはたせなくてね。今夜は暇があったので出かけてきたところなの」というと、女たちは「こんなにいい晩ですもの、ごゆっくりなさってください。ご長命を祝ってお酒をさしあげますから」と侍女にいいつけて取りにやった。

「ここで大丈夫なの。」と十八番目のおばさんがきくと、楊氏が、「ご主人はいいお方ですし、とても清らかなところです。」「ご主人はどこにいらっしゃるの。」）

この箇所を宇佐美はこのように翻訳している。

小女は謝辞を述べつつ、原と來し路より回り去りしが、程なく又一隊の女子を案内して、各々花を分け柳を約して入り來り、一々玄微に引合はしめぬ、玄微は月の光に透して仔細にこれを看れば、孰れも皆姿容媚麗にして體態輕盈、或は濃に或は淡にして其の装束各々一ならで、①甲は甲の妖艶あり、乙は乙の妖艶ありて、其縹致も亦相異れり、②（A）いかに世に類なき美女子等の一群、日來年來愛に愛づる我が苑中の花よりも愛らしく、看れば看る程の風情彌まされども、原是れ何れの處よりか來りけん、（B）其來歴素性もいと怪しく思ひければ、飽までも

問ひ糾さばやと③初對面の挨拶畢るや直様、先々これにとて邀へて室中に入らしめぬ、賓主の坐も已に定りてければ、玄微は口を開きて云ひけらく、

玄「④今宵はようこそ敝園に光臨し給ひぬ、貴嬢方皆々の御姓氏は何を仰せらるるにや、一々洩し聞えてよ、又今宵は何れかの御姻戚を訪ねられんとの事、其は何れの御宅なるや、左こそ聞まほしけれ」

この一群の中に一人の綠衣したる女子あり、進み出て答へて又云ひけらく、

綠、「妾は楊氏にてこそあれ、又これなる白衣と穿てるは、こは是れ李氏にて在し、又これなる絳衣を着たるは、こは是れ陶氏にて在すなり」

と斯く逐一指示し、最後に一人の緋衣したる小女に到りて頓て又云ひけらく、

綠、「この一人は石氏にて阿措なん呼ぶなり、妾等は異姓のものにしあれども、倶に是れ一行の姉妹にてぞ侍る、先つ頃より封家の十八姨より早晩か來り訪ふべしと申越もありつれど、今尚其事なし、今宵は月色のいと面白氣なるがまま、打揃ふてこなたより姨の許を訪ねんと思ひ立し折柄これをよき序に、平日いともありがたき恩愛眷顧を垂れさせ給ふ處子の處にも立寄りて聊か謝意とも陳べんとなり、處子よ妾等は素より怪しきものにあらぞ、疑なき給ひぞ」

⑤玄微は不思議の念更に霽れやらぞ、いかに又これと問ひ試みばやと少しく躊躇ふ折しも、那青衣したる小女と慌忙しく走り入りて報じて云ふ様、封家の十八姨今ころに来臨せられぬと、皆の女子らは一同坐い起ち、且つ驚き、且つ喜び、急ぎ出てこれを迎へて内に請じ入りぬ、⑥この時玄微は翻然と身をかはせて傍邊に隱れ、隙間よりこれ等眾女子は何とか爲をらんと瞳を凝してを窺ひ居たりけるに、

他們は一同先つ相見の詞を述べ畢りて、更に其中の一人の女子進み出て云ひけらく、

⑥女「今しも妾等一同貴姨と訪問奉らんとて出來りて侍る、意はざりき、貴姨のここに御光臨あらせ給はんとは、こは是れ双方こころ同じく、情の一なるを見るに足るべきことならぞや、誠にこよのふ嬉しく思ひ侍る」

と云ひつつ、皆々一同十八姨に向て恭しく一禮を致せしかば十八姨は眾女子を一睨して、さも横柄なる面色にて云ひけらく、

⑦姨「我が身は毎々卿等と訪問ばやと思ひつれども、種々の故障ありて得果さざりき、今宵しも間に乗じて來ぬることを得たるは、又我が身に取りても歡喜の限りをこそ云ふべけれ」

眾女子は云ひけらく、

眾「この頃珍しきこの良夜、打寛ぎて座し給はれ、こころばかりの饗應に、只一尊を捧げて、貴姨が壽を祝ひ奉らまほし」

其時許多の青衣したる小女は、夫々其意を領し、酒餚を取り來らんとて出で去りぬ、十八姨は元來酒を嗜む性なれば、一尊と聞きてこころ嬉しくやありけん、面上に笑を湛へて点頭つつ、推辭まん色をかくぞ見えけるが、忽ち問を起こして云ひけらしく、

姨「ここは何人の住居じゃ知らねども緩く坐し居んも苦しう

は侍らぞや」

那綠衣したる楊氏は突き進み出て答て云けらく、

楊「この家の主人はいと賢き處士にて、地も亦極めて清雅幽邃なれば、今宵は暫く借受けて、酒宴の席に充てんも何か仔細の侍るべき、こころな置せ給ひぞ」

十八姨は云ひけらく、

姨「然らば主人は何れに在し侍るぞ」

まず傍線部①「隨從女郎、盡皆妖豔、正不知從那裏來的。」についてである。「隨從（suí cóng）」は「付き従う」若しくは「従者」の意味であるから「従者の女郎」である。「盡皆（jìn jiē）」は後に二音節語を導き、「みな・悉く・すべて」を意味する副詞であるから、訳文は「女郎達は皆妖艶だが、どこから来たのかさっぱり判らない（＝正不知）」の意味となる。その箇所を宇佐美は「甲は甲の妖豔あり、乙は乙の妖豔ありて、其縹致も亦相異れり、いかに世に類なき美女子等の一群、日來年來愛に愛つる我が苑中の花よりも愛らしく、看れば看る程の風情彌まされども、原是れ何れの處よりか來りけん、其來歴素性もいと怪しく思ひければ、飽までも問ひ糺さばやと」としている。主語の「隨從女郎（従者の女郎）」は訳出していないが、翻訳に困難な語句ではなく、恐らく前後の文脈から把握可能として、文意を明確化するために省略したのであろう。「盡皆」の「皆」を「甲は甲の……乙は乙の……其縹致も亦相異れり」としたのは、やや大仰な表現であるが、原義の範疇であると思われる。

ただ訳文の中には大幅に加筆潤色されている箇所も散見される。例えば傍線部②は「正不知從那裏來的」つまり「（美女達が）どこから来たのかさっぱりわからない」という一文に過ぎない。その箇所を宇佐美は、「（A）いかに世に類なき美女子等の一群、日來年來愛に愛つる我が苑中の花よりも愛らしく、看れば看る程の風情彌まされども、（B）原是れ何れの處よりか來りけん、（C）其來歴素性もいと怪しく思ひければ、飽までも問ひ糺さばやと」と記述している。これは二重傍線部（B）が原文の翻訳であり、その前後の傍線部（A）と（C）は、原文に準拠した修飾句で構成された文節であることが理解出来よう。すなわち傍線部（A）は、日頃愛でていた花よりも美しい世に類いない美少女の一群は、と「一隊女子（美少女の一群）」に関する連体修飾語で構成されている。そして、傍線部（C）は、傍線部（B）「正不知從那裏來的」とほぼ同義で構成され、「（B）どこから来たのかさっぱり判らない（C）その素性も来歴も見当がつかないので、尋ねなければと」のように、原義を敷衍した内容を繰り返し述べていることが理解出来よう。

次の傍線部③「相見畢、玄微邀進室中、分賓主坐下、開言道」は、（玄微と少女達は）挨拶がすむと、彼は（少女達を）部屋の中へ迎え入れて、主客それぞれの席についた。そこで玄微は口を開いてたずねたという意味であるが、宇佐美は「初対面の挨拶畢るや直様、先々これにとて邀へて室中に入らしめぬ、賓主の坐も已に定りてければ、玄微は口を開きて云ひけらく」と訳している。「相見（xiāng jiàn）」は、「面会する・顔を合わせる・出会う」の意味で、白話語彙では「挨拶をする」と解釈する。そのためここでは前後の文脈から「（玄微と少女達は）挨拶をし終えて」であろう。そして「邀進室中」の「邀（yāo）」は、「招く・誘う」の意味であり、何を誘ったのかと言えば「進室中（室内に入ること）」である。そして「分賓主坐下」であるが「賓主」

は賓客と主人であり、主客が分かれて席についたという意味であり、宇佐美もこの箇所を「賓主の坐も已に定りてければ」と訳しており、傍線部③における宇佐美訳は忠実な逐語的であると言える。

また傍線部④「請問諸位女娘姓氏。今訪何姻戚、乃得光降敝園」であるが、原文中の「乃」は、「そこで」「やっと」の意味であり、「敝園（bì yuán）」は謙譲語で一人称の卑語である。そのため、「あなた方のお名前は何で、どこの親戚をお訪ねになり、それで弊園にお立ちより頂く機会を得ることになったのですか」と、まず来訪した人々の姓名を尋ね、庭園を訪れた結果が、どこの親戚訪問によるものかという原因――当初の目的が親戚宅訪問であるにも関わらず、結果的に玄微の庭園へ偶然訪れた原因――となったという文脈に沿って玄微は少女達に尋ねている。それが該当箇所の要点であり、極めて複雑な一文であるが、そこを宇佐美は「今宵はようこそ敝園に光臨し給ひぬ、（D）貴嬢方皆々の御姓氏は何を仰せらるるにや、一々洩し聞え、又今宵は何れかの御姻戚を訪ねられんとの事、其は何れの御宅なるや、左こそ聞まほしけれ」と訳している。このように文頭に傍線部（D）で「貴嬢方皆々の御姓氏は何を仰せらるるにや」文の前後を入れ替えてはいるが、極めて的確に翻訳しており、訳者の翻訳能力の高さを感じる。

そして傍線部⑤「玄微方待酬答、青衣報導、『封家姨至。』眾皆驚喜出迎」であるが、「方（fāng）」は「ちょうど・まさに・やっと」、「待（dài）」は古代白話語彙で「～しようとする」「～するつもりである」という特殊表現であり、「玄微方待酬答」は「玄微がまさに答えようとしたとき」の意味である。この箇所を宇佐美は「玄微は不思議の念更に霽れやらぞ、いかに又これと問ひ試みばやと少しく躊躇ふ折しも」と、玄微の疑念が晴れないまま、どのように質問すれば良いのだろうかと躊躇っていたがその折しも、とあるように「方（fāng）」は「折しも」と翻訳しているが、「待（dài）」は対応できていない。

その後の「青衣報導『封家姨至。』眾皆驚喜出迎」は、特に難しいことはなく、「侍女が『封おばあさまが見えました』と知らせ、みんなは大喜びで出迎えた」の意味である。この箇所であるが、宇佐美は「那青衣したる小女と慌忙しく走り入りて報じて云ふ様、封家の十八姨今ころに来臨せられぬと、皆の女子等は一同坐い起ち、且つ驚き、且つ喜び、急ぎ出てこれを迎へて内に請じ入りぬ」と正確に翻訳している。

傍線部⑥「正要來看十八姨、爲主人留坐、不意姨至、足見同心」というコメントであるが、ここの発話者は「眾女子」である。その上で「正要（zhèng yào）」は「ちょうど～したいところ」「ちょうど～しているところ」の連語表現であるから「正要來看十八姨」は、（少女達が）「ちょうど十八姨（の自宅）を訪問に行こうとしているところ」である。「爲主人留坐、不意姨至、足見同心」の「留坐（liú zuò）」は「（客などを）とどめる」という白話動詞であり、「爲主人」の「爲（wèi）」は目的や原因を表す「～のため（に）」であり、「主人に引き止められたところへ、思いがけずおばが来た（不意姨至）」となる。

最後の「足見同心」の「足見（zǔ jiàn）」は「（～によって）～ということが判った」という動詞であり、まとめると「ちょうど（＝正要）これから十八姨（の自宅）を訪れようとしたところでした。主人に引き止め（＝留坐）られたところへ、思いがけずおばが来たなんて、心が同じしるしです」という意味となろう。

その箇所を宇佐美は「今しも（＝正要）妾等一同貴姨と訪問奉ら

んとて出來りて侍る、意はざりき、貴姨のここに御光臨あらせ給はんとは、こは是れ双方こころ同じく、情の一なるを見るに足るべきことならぞや、誠にこよのふ嬉しく思ひ侍る」と、「正要」を含めてほぼ正確に翻訳しているが、白話独特の語彙「爲主人留坐」を省略しているのが惜しまれる。

最後の傍線部⑦「屢欲來看卿等、俱爲使命所阻、今乘間至此」は、十八姨の発言で文言を基本とした表現である。「屢欲來看卿等」の「屢(lǚ)」は、「しばしば・たびたび」で「來看卿等（あなた方にお目に掛かる）」を「欲」していたのであるから、「たびたびあなた方にお目に掛かりたいと思っていた」という意味である。そして「俱爲使命所阻」の「俱(jù)」は、（「十八姨」と「眾女子」）とが「すべて・みな・ともに」で、使命（他用）のために「所阻(suǒ zǔ)」＝阻害される所となった。そして、「今乘間至此」の「乘間(chéng jiān)」は書面語で「付け入る・付け込む・相手がうっかりしている時に乗じる」、「至此(zhì cǐ)」は「ここで・今になって・今更」の意味である。そのため「今乘間至此」は、「今ようやく暇を盗んで」という内容であろう。以上をまとめると、「たびたび（＝屢）あなた方にお目に掛かりたいと思っていたが、他用のために果たせません（＝所阻）でした。そこで今ようやく暇を盗んで（＝今乘間至此）ここに参上しました」という意味である。

その箇所を宇佐美は「我が身は毎々（＝屢）卿等と訪問ばやと思ひつれども、種々の故障ありて得果さざりき（＝所阻）、今宵しも間に乗じて（＝今乘間至此）來ることを得たるは、又我が身に取りても歡喜の限りをこそ云ふべけれ」とあり、「屢欲來看卿等、俱爲使命所阻、今乘間至此」とある文言表現を「我が身は毎々卿等と訪問ばやと思ひつれども、種々の故障ありて得果さざりき、今宵しも間に乗じて來ることを得たる」とほぼ完璧に翻訳している。しかしそれに関わらず「又我が身に取りても歡喜の限りをこそ云ふべけれ」は、原文には全くない加筆がある。

以上が宇佐美による『讀賣新聞』紙上における連載であるが、翻訳や日刊紙上で連載された場合には、各種の制約がある。例えば日刊紙の場合には、専著や専門誌に比べて紙面スペース上の制約があり、文字数が限られていること。そして読者層が専門的な予備知識に乏しい一般人士が対象であるため、専門的用語の使用は難しいほか、語釈の付与や脚注の設定、そして詳細な説明も加筆することが難しい。そのため、殊に翻訳が日刊紙に掲載されている場合には、（日刊紙以外に掲載された）翻訳とは異なる特定の傾向が見られる。そのため、その点を考慮して翻訳状況を分析する必要がある。

かかる事情から、次章では、宇佐美「花精」と同じく日刊紙『日刊支那事情』に掲載された『今古奇観』巻三四「女秀才移花接木」の翻訳「移花接木」を比較対象として、日刊紙掲載翻訳という視点から宇佐美の翻訳の傾向と特徴を分析したい。

三・日刊紙掲載翻訳文の分析

（1）比較対象となる『日刊支那事情』所載翻訳文の傾向

『日刊支那事情』は、日刊支那事情社が東京で刊行した日刊紙である。『日刊支那事情』という名の通り、中国の現地最新情報を邦字（日

本語）で報道紹介する日刊紙で、その発行元である日刊支那事情社の所在地は、上海日日新聞社東京支社と同一である。また、記事も『上海日日新聞』から配信を受けていること、そして日刊支那事情社と上海日日新聞社の社主【十二】が宮地貫道で一致【十三】することから、上海在留邦人向けの現地邦字新聞である『上海日日新聞』の内容を東京に配信していたものと推定できる。

そして『今古奇觀』巻三四の訳者である井上紅梅は、一九一五年秋に上海日日新聞社に入社【十四】し、『上海日日新聞』紙上で魯迅小説の「社戯」「風波」「在酒楼上」の翻訳を発表したと言及【十五】している。そのため紅梅が『上海日日新聞』の姉妹紙である『日刊支那事情』でも文芸欄を担当することとなった。井上紅梅は「三言」所収篇に関して多くの翻訳を行い、専著『今古奇觀』【十六】のほか、東洋協会大学の学術誌『東洋』【十七】に掲載しているが、彼は日刊紙『日刊支那事情』にも六篇の「三言」所収篇の翻訳を連載【十八】している。それでは『日刊支那事情』における紅梅の翻訳状況について、その概要を一九二六年五月二七日～七月二日連載の「移花接木」の翻訳から紹介したい。

なお、引用箇所の傍線のうち、実線は、原文がありながらも紅梅が翻訳しなかった箇所であり、点線は紅梅が原文の内容を要約して翻訳した箇所である。なお二重線は特に翻訳状況を知ることが出来る箇所を示している。

明朝洪武年間のこと。広東広州府の田孟沂（もうぎ）は、父の田百禄が教官に赴任するのに従って成都を訪れ、張氏の家庭教師に迎えられた。そして二月一二日の花朝の日に孟沂が帰宅する途中、桃林で一人の美人に出会った場面である。

到了二月花朝日、①孟沂要歸省父母。主人送他節儀二兩、孟沂藏在袖子里了、歩行回去。偶然一個去處、望見桃花盛開、②一路走去看、境甚幽僻。孟沂心裡喜歡、佇立少頃、觀玩景緻、忽見桃林中一個美人掩映花下。孟沂曉得是良人家、不敢顧盻、徑自走過。③未免帶些賣俏身子、拖下袖來、袖中之銀、不覺落地。美人看見、便叫隨侍的丫環拾將起來、送還孟沂。孟沂笑受、致謝而別。

明日、孟沂有意打那邊經過、只見美人與丫環仍立在門首。孟沂望着門前走去、丫環指道、「昨日遺金的郎君來了。」美人略略斂身避入門內。④孟沂見了丫環敘述道、「昨日多蒙娘子美情、拾還遺金、今日特來造謝。」

（二月、花朝の日、①孟沂は両親を訪ねることにした。主人が節季の祝儀を二両くれたので、袖にしまって帰途についたが、途中、桃の花が咲き乱れているのが遥かに見えたので、②近づいて行ってみると、いかにも閑静なところ。嬉しくなり、しばらく足を止めて眺めているうち、林の奥の花かげに美しい人が立っているのに気がついた。しかるべき家の婦人だと見えたので、まじまじ見るのは失礼と行きすぎようとしたが、③ついしなをつくって袖をゆすって歩いてしまったので、しまってあった銀をポトリと落とした。それを見た美人が、かたわらの小間使に命じて拾わせ、彼に返してくれたので、彼はにっこりして受け取り、礼を言って別れた。

あくる日、孟沂がわざわざ回り道してそこへ行ってみると、またその美しい人が小間使を連れて門の前に立っているではないか。彼が近づいて行くと、小間使が、

「昨日、お金を落とした殿方がいらっしゃいましたわ」

と指さしたので、美人は軽く会釈して中にはいってしまった。④彼が小間使に、

「昨日は奥さまのご好意で金を拾っていただいたので、今日はお礼にうかがいました」といった。）

とあるところを、紅梅は次の通り翻訳している。

丁度時節は舊歴の二月のことだ、途中に一處の桃林があつて見渡す限りの花盛り②然も四境幽僻、孟沂は覺えず佇立して此佳景を觀玩して居るとこの桃林の中に一个の美人が居て花下に掩映して見へる、孟沂は定めて良家の婦人であらうと思ふから敢て顧盼もせず其儘通り過ぎたが③未免帶些賣俏身子、幾分氣取つたと見へて、袖から銀を落とした、美人は之れを見ると直ぐに隨待の女中に拾はせ孟沂を追ひかけて渡させた、孟沂は笑つて之を收め謝辭を述べて別れたが、翌日の歸り途には再び彼の美人に出遇ひはしまいかと賴めぬことを心賴みにしながら桃林の中を通り拔けると果して美人は女中と二人で或る家の門前に佇んで居たが、孟沂が來るのを見て女中は指さし、『昨日お金を遺した郎君が來られました』

と告げると、美人は何か女中に囁いて門の内へ這入つた。

このように大正一五（一九二六）五月二七日付「移花接木（一）」（『今古奇觀』巻三四「女秀才移花接木」）の紅梅訳では、傍線部①にある孟沂が両親を訪ね帰宅する場面である点、主人が節季の祝儀として（銀）二両をもらった点、その銀を袖にしまっていた点が省略されている。また段落最後の傍線部④にある、孟沂が小間使いに向けた発言である「昨日は奥さまのご好意で金を拾っていただいたので、今日はお礼にうかがいました」も、前後の文脈から容易に判断できる。これらは、物語が展開する段階で読者に理解出来る内容であるから削除したのであろう。また傍線部②「一路走去看、境甚幽僻。孟沂心裡喜歡、佇立少頃、觀玩景緻（近づいて行ってみると、いかにも閑静なところ。嬉しくなり、しばらく足を止めて眺めているうち）」も、桃林の情景や孟沂の挙動の説明として冗長な表現が繰り返されている。そのため「然も四境幽僻、孟沂は覺えず佇立して此佳景を觀玩して居ると」と簡略化されている。また傍線部③「未免帶些賣俏身子」であるが、これは難解である。「未免（wèi miǎn）」は、「①～と言わざるを得ない（相手に対して同意しかねることを表すが語気は柔らかい）、②～は免れない」という副詞で、「賣俏（mài qiào）」は「しなをつくる・なまめかしい姿態で誘惑する」という動詞である。ただ、「しな（科）を作る」というのは「こびを含んだ・色っぽい動作・様子」であり多く女性が行う。ただ、ここでの主語は男性の孟沂である。そのため直訳すると「（そのまま通り過ぎようとしたが）孟沂は彼女を誘惑するような身振りを仕掛けないわけにはゆかず」となろう。ここで紅梅は「未免帶些賣俏身子、幾分氣取つたと見へて」と訳している。原文をそのまま記述しているが「幾分氣取つたと見へて」に該当する原文がない（原文には「拖下袖來（袖をゆすって）」となってしまう）ため、「未免帶些賣俏身子＝幾分氣取つたと見へて」の意味とも考えられる。「賣俏」という異性を誘惑する身振りを日本語に翻訳することが困難であったのであろうか、やや曖昧に「気取った」と表現している。

以上、『日刊支那事情』所載「薄情郎」「移花接木」から紅梅の翻訳状況をまとめると、①基本的には原文に忠実な逐語的な翻訳を試みている、②難解な箇所は原文をそのまま記載するという傾向が認められる、以上の二点が紅梅による「三言」所収篇翻訳の特徴であるが、殊にここで注目すべきなのは、③日刊紙の連載という字数的制約のため原文に挿入された詩詞を省略し、重複や冗長な記述を割愛したり、簡略化したりして文字数を節減する傾向が認められるという点である。③にある削減や省略は、他の媒体（専著・学会誌）には見られず、日刊紙独自の傾向である。そのため訳者である紅梅が日刊紙連載を前提とした配慮と考えて相違ない。

（2）『讀賣新聞』所載翻訳文の傾向

井上紅梅は日刊紙『日刊支那事情』に翻訳文を掲載するに際し、（日刊紙以外に掲載された訳文に比べて）原文にある冗長部分を省略・簡略化していた。これは翻訳を行う際に、一般読者に対しての配慮と思われる。

それに対して宇佐美の訳文はどうか。結論を先に述べると、井上紅梅訳の傾向と異なり、原文にない訳者の加筆が散見されるのである。

それでは『讀賣新聞』所載の宇佐美延枝による「灌園叟晩逢仙女」の翻訳の中で、宇佐美の翻訳で特徴的に見られる傾向について、具体的な事例をあげながら分析を試みたい。

宇佐美延枝「花仙」にある訳文を見ると、「灌園叟晩逢仙女」では文語的表現や口語的表現が混在しているが、その原文を訳者は的確に翻訳している。一部難解語彙の対応に苦慮してる場面が認められ翻訳をしない箇所も見られるが、難解箇所の翻訳回避は少なく、原文の翻訳を省略している箇所は、文脈的に不要と訳者が判断した箇所が多い。

その一方で原文にはなく、宇佐美訳では訳者による加筆が見られるが、その加筆状況が、従来の翻訳者による加筆傾向とは大きく異なり、かなり独特と言える。

紙幅の関係から、第二節で扱った「灌園叟晩逢仙女」の入話から挙例する。

傍線部②「正不知從那裏來的」の訳文を検討したい。原義は「どこから来たのかさっぱりわからない」であり、主語は「隨從女郎（従者の美女達）」である。この箇所を宇佐美は、

（A）いかに世に類なき美女子等の一群、日來年來愛に愛つる我が苑中の花よりも愛らしく、看れば看る程の風情彌まされども、②原是れ何れの處よりか來りけん、（B）其來歴素性もいと怪しく思ひければ、飽までも問ひ糺さばやと

と翻訳している。訳文中にある傍線部にある「原是れ何れの處よりか來りけん」のみで、翻訳としては必要かつ十分である。それにも関わらず宇佐美は、原文に加えて傍線部（A）「いかに世に類なき美女子等の一群、日來年來愛に愛つる我が苑中の花よりも愛らしく、看れば看る程の風情彌まされども」と加筆している。これは前掲の原文「一個個姿容媚麗、體態輕盈、或濃或淡、汝束不一（どの女も

みな容姿は艶に美しく、ものごしも軽やかで、あるいは濃くあるいは淡く、衣裳はさまざま)」という「隨從女郎」の美しさとその程度を表現する描写を基本的に繰り返している。また傍線部(B)「其來歴素性もいと怪しく思ひければ、飽までも問ひ糺さばやと」あるが、この一文の主語は当然玄微であり、原義を敷衍した内容を繰り返し述べていることが理解出来よう。

また傍線部⑦「屢欲來看卿等、俱爲使命所阻、今乗間至此(いつもあなた方に会いたいと思いながら、お役目のために果たせませんでした。今夜は暇を盗んで出かけてきました)」という十八姨の発言であるが、その箇所を宇佐美は、

我が身は毎々卿等と訪問ばやと思ひつれども、種々の故障ありて得果さざりき、今宵しも間に乗じて來ることを得たるは、(C)又我が身に取りても歡喜の限りをこそ云ふべけれ

としている。原文「屢欲來看卿等、俱爲使命所阻、今乗間至此」を宇佐美は「我が身は毎々卿等と訪問ばやと思ひつれども、種々の故障ありて得果さざりき、今宵しも間に乗じて來ることを得たる」と的確且つ過不足なく翻訳しているが、なぜか彼女は原文に全くない傍線部(C)「又我が身に取りても歡喜の限りをこそ云ふべけれ」の加筆を行っている。これは該当箇所直前にあった傍線部⑥には(衆女子……說道)「不意姨至、足見同心(おばさまがいらっしゃるなんて、心が同じしるしですわ)」とあり、衆女子と十八姨がお互いに面会したいという希望を抱いていたとあるため、加筆部分でも「又我が身に取りても歡喜の限りをこそ云ふべけれ」のように反映されている。そのため原文に依拠して、その内容について表現を変えて繰り返している。

この種の翻訳傾向は、宇佐美の訳文に少なくない。例えば後文にある玄微が「遂手斟一杯遞來、酒醉手軟、持不甚牢、杯才擧起、不想袖在箸上一兜、撲碌的連杯打翻(酒をついで杯をわたそうとしたが、酔って手がしびれているので、しっかりと持てず、杯を上げた途端に、うっかり袖を箸にひっかけてぽろりとひっくり返してしまった)」とした箇所についてであるが、ここで玄微は、①酒杯を渡そうとする、②酔いで手がしびれている、③杯を持つ時、袖を箸に引っかけてしまう、④酒杯をこぼす、という四点の要素で構成されており、②③という条件が加わることで、①の行為が④となるという一文であるが、宇佐美は、

と云ひつつ①直ちに手づから巨觥に酒斟み湛へて突と起上り、あたりを見廻して彼にや勸めん、此にやさあらんと暫時躊躇ふも、こころの狂ひ②手の顫き、持てる觥いと覺束なく、趾のあゆみも蹌踉として地に住らぞ、忽ち見る③手上の觥いかなる機か自己と自己が袖に觸れ、④咄嗟とばかりに打翻されぬと、

と、玄微が酒を湛えた杯を持ち立ち上がり、辺りを見回して誰にその酒を勧めようかと暫く戸惑っていたが、杯を持つ手がおぼつかない。そして足下も覚束ない様子であったが、不意に袖が触れて、咄嗟に零れてしまったとある。ここでは原文にある四点の要素は完備しているが①酒杯を渡そうとすると、②酔いで手がしびれているの

間に、そして②と③杯を持つ時袖に箸を引っかけてしまうの間に、訳者による加筆が行われている。

右掲の訳文について、具体的に確認すると、玄微は①酒を湛えた杯を手に起き上げた、しかし②酒杯を持つ手が震えて覚束ない、という前後の文脈は逆接の関係にあることがわかり、①で述べた内容から予想されなかった②の結果が示されている。そこで①②の間に宇佐美は、「玄微は周辺を見渡して誰に酒杯を勧めようかと、どうしようかと暫く戸惑っていたが、酔いが回ってふらついた」と補足し、逆接関係にあった①②間の文脈をより円滑化している。

また、②③の間についても同様の傾向が見える。

訳文について文脈を具体的に確認すると、玄微は②酒杯を持つ手が震えて覚束ない状態であり、③では手に持った酒杯が何かの機会に袖が触れてしまい、という順接の関係にあることがわかり、②が後件（③）の順当な原因を説明している。そのため②と③との間には因果関係があり、文脈として過不足はない。それにもかかわらず宇佐美は「趾のあゆみも蹌踉として地に住らぞ」と酒に酔った結果として手が震えているだけではなく、足下をふらついて心許ない状況を加筆し②③間の文脈を更に具体化しているのである。

このように宇佐美による翻訳に見られる加筆は、新たな要素を付け加えるのではなく、文意から逸脱しない範囲での潤色や加筆――原文内容に即した文脈の円滑化や具体化が行われていることがわかる。

それでは、なぜそのようなことを宇佐美はしたのか。それは、そもそも宇佐美による「抱甕文庫自序」にも「文（ふみ）作る一助とも思ひて」や「文作る稽古の一助にもとてせしなれば」とあり、所期の目的が自らの文章技術の向上にあり、文章技術向上という目的を達成する手段（もしくは教材）として白話小説の翻訳が選ばれたに過ぎないからである。事実宇佐美は、一八九八年一〇月に自ら創作した小説「不幸の幸」を『大日本婦人教育会雑誌』に掲載しているところからも理解出来る。彼女によって『今古奇觀』の翻訳は目的ではない、自らの小説創作を行う上での手段だったのである。

自序でも訳者の意志に反して刊行されるに至った経緯と弁解を長々と説明し、『抱甕文庫』は厳密な翻訳を目的としたものではなく、「徒然のあまり文作る稽古」のためだったと繰り返し断り書きを行い、「冀くは大方の諸彦訳者の薄才浅学を憐み、其誤謬の指摘すべきものは教正を垂れて益を後進に与へ給わんことを【十九】」など、不自然とも思われるほど翻訳刊行に恐縮する文面が随所に見える所からも、本書刊行は当人の本望ではなかったものと思われる。確かに訳文を見る限りでは、一部の特殊な白話語彙には対応できていないほか、原文に対する忠実度も一九二六年発表の佐藤春夫訳【二十】に比べて若干低く、一九二五年発表の鈴木真海訳【二十一】と同じ程度の翻訳精度ではないかと見られる。

そのため今回の宇佐美訳は、当時研究者の間で行われていた白話小説の訓読翻訳に関する是非についての議論【二十二】には全く言及しておらず、恐らくは口語訳化の議論を認識せずに翻訳した可能性が高い。

しかし、明治三一（一八九八）年当時は、白話語彙に関する工具書も十分になく、且つ中国人の助力もない状況で、①比較的高い水準で翻訳を刊行したこと、②出版計画は頓挫する結果となったが

二〇篇の翻訳を行い、一〇篇の出版を企画したこと、③初めての女性翻訳者であること、そして、④訓読翻訳の域を脱し口語訳へと向かう過渡期的な存在として、「三言」所収篇の受容史の上では画期的な存在であると言える。

おわりに

本論の内容を要約すると、以下の通りである。

Ⅰ　小論では、筆者が発見した宇佐美延枝の翻訳『李謫仙・蘇小妹（抱甕文庫第壹編）』に注目し、宇佐美延枝が取り組んだ翻訳活動の一端を考察し、先行研究の不備を補完することを目的とした。

Ⅱ　宇佐美の手による『抱甕文庫』は「三言」所収篇の翻訳である。宇佐美による「自序」によると、彼女は静養中に「三言」の選集『今古奇觀』全四〇篇のうち二〇篇を試訳したが、その後翻訳の存在が哲学書院主人に知られる所となった。宇佐美の翻訳は書肆の説得の末に刊行され、翻訳の続刊は一〇編まで企画されていた。『今古奇觀』の半数に及ぶ翻訳規模と、訓読翻訳が一般的であった明治三一（一八九八）年の時期に散文体の訳文を試みるなど、翻訳時期を考慮しても短篇白話小説受容史の観点からは看過できない存在と言える。ただ今回の宇佐美訳は、当時研究者の間で行われていた白話小説の訓読翻訳に関する是非についての議論にも言及されておらず、恐らくは口語訳化の議論を認識せずに翻訳した可能性が高い。

Ⅲ　宇佐美の文体は、漢字仮名まじりによる散文体が採用されている。翻訳の姿勢については概ね原文に即して翻訳を試みており、原文に対する忠実度も一九二五年発表の鈴木真海訳とほぼ同一水準で、翻訳水準も低くはない。しかし白話語彙の未習熟のためか、原文をそのまま訳語としているほか、多少内容説明の必要からか、原文にない訳者独自の加筆が散見される。しかし、出版当時白話語彙に関する工具書も十分になく、且つ中国人の助力もない状況で、比較的高い水準で翻訳を刊行したこと、二〇篇の翻訳を行い一〇篇の出版を企画したこと、初めての女性翻訳者であること、そして訓読翻訳の域を脱し口語訳へと向かう過渡期的な存在として、「三言」所収篇の受容史の上では画期的な存在であると言える。

本論文は、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）「民間の視座を導入した中国通俗文芸の受容と自国化の研究―受容文化の多角的考察を目指して―」の研究成果の一部である。

注

【一】拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について――村松暎・魚返善雄の翻訳と翻訳層の交代について」（『国際文化研究科論集』一七号、二〇〇九年）参照。

【二】拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について――明治時代から大正時代までの翻訳事業を中心として」（『国際文化研究科論集』一四号、二〇〇六年）、同「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について――一九一〇年代～二〇年代の動向を中心として」（『国際文化研究科論集』一四号、二〇〇六年）、同「白話小説翻訳史における宮原民平の存在について――『支那文学大観』の事例を中心に」（『アジア遊学』一〇五号、二〇〇七年）、同「中国通俗文芸受容史における翻訳文体の問題について――佐藤春夫の『百花村物語』を中心として」（『池

田雄一教授古稀記念アジア史論叢』燎原書店、二〇〇八年）、同「支那に浸る人――井上紅梅が描いた日中文化交流」（『から船往来―日本を育てたひと・ふね・まち・こころ―』中国書店、二〇〇九年）、同「日本伝統文化の形成を「訓読」から考える――近代日本における白話小説の文体」（『訓読から見なおす東アジア』東京大学出版会、二〇一三年）参照。

【三】辛島驍「醒世恒言（一）各巻解題」『醒世恒言（2）』（東洋文化協会全譯中國文學大系、一九五八年）、一頁参照。なお、宇佐美の訳業については、小川陽一『三言二拍本字論考集成』（新典社、一九八一年）一八〇頁参照。

【四】明治文献資料刊行会編『明治前期書目集成（補巻之三）』（明治文献資料刊行会、一九七五年）五四頁参照。

【五】東京高等大同学校は一八九八年に梁啓超が中心となって創立した華僑学校で、横浜大同学校の馮自由ら二〇人ほどが転学し開学した。排満州論、革命志向が強かったが、財政難のため、当時東京高等大同学校の幹事であった柏原文太郎が日本の政党から募金を募り、校名を「東亜商業学校」と改め再建される。しかし、その後再び経営困難に陥り、清国公使に引き渡され校名は清華学校となった。平岡さつき『現代中国と華僑教育』（多賀出版、一九九一年）三四三頁参照。

【六】市川信愛「華僑学校教育の国際的比較研究（上）」（『トヨタ財団助成研究報告書』宮崎大学教育学部社会経済研究室、一九八八年）一七一頁参照。

【七】宮武外骨『府藩県制史』（名取書店、一九四一年）二三四頁参照。

【八】彦根正三編『改正官員録』（博公書院、一八八三年）一四一頁参照。彦根正三編『改正官員録』（博公書院、一八八四年）一四五頁参照。

【九】東洋大学創立百年史編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター編『東洋大学百年史 通史編（一）』（東洋大学、一九九三年）「哲学書院の設立」（六六頁～六八頁）参照。なお『抱甕文庫』出版直前（一八九八年五月）の哲学書院刊行物リストについては、東京書籍商組合編『明治書籍総目録』（ゆまに書房、一九八五年）二四六～二五四頁参照。

【十】宇佐美による「抱甕文庫自序」は長文であるので、要点を示すと以下の通りである。

抱甕文庫 自序

去る四年前より。醫生の慫慂に任せ久しきに亙れる妾が身の病痾を養はんとて。帝都を距る程遠き片田舎に引籠りしが。今年の春に至り再び帝都に歸寓しぬ。此間滿る三年の春秋。（中略）固より片田舎の事にしあれば訪ひ來て慰めん人もなければ。尋ね行きて語らはん友もなく。いと徒然に堪えかねるまゝ。書筐の底などかい採り。古本雜誌類の中より。今古奇觀となんいふ小説の四十回ばかりあるを取り出し試に繙きて讀みぬ。件の一書は大方諸彦の皆知り給ふ如く。支那短篇小説の中いとも著名なるものにて。呉中抱甕先生の編輯せしものなり。讀みもてゆくに文意の會得しがたきところあり。又文字など脱落磨滅して讀み得ぬところも多かりけるが。文作る一助とも思ひて惟拾ひ〳〵に二十回ばかりを繙譯せり。元來支那の文字には能くも熟せぬものなるに。文作りなれぬ拙き筆もて繙譯せしことなければ。（中略）此頃哲學書院の主人高頭翁訪ひ來りて四方八方の物語の序。支那小説の事など云ひ出られぬるに。端なくも本書繙譯の事を口走り。辭めども得ずして竟にこれを取り出して示しければ。持ち行きて一覽せばやとて其儘携へ去られぬ。日數經て復た尋ね來り云はる、やう。「近小説の流行殊に旺盛を極め新著日に幾種あるを知らず。間々名文傑作ありて江湖の看客として閲覽に厭ざらしむ。（中略）惜むべきは支那小説の繙譯至て其種に乏しき事是れなり。彼三國志水滸傳西遊記などの類は久しき以前より繙譯して江湖看客の閲覽に供せらるゝも。其他に至ては寥々晨星も啻な

らず。原書は各種輸入せられて江湖に散在すと云ふとも。極めてよく支那の文字を解釋する人にあらざるよりはこれを讀むも爭て其意を了解し得ん。支那小説繙譯の今日に急なることこれにて思ひ半ばに過ぎん歟。然るに此度貴譯の今古奇觀を借覽したるに。篇中收むる所の奇譚珍事は支那小説として固有の趣味と特種の曲調とを具へ。我等泰西小説を見慣れたるものに取ては目新しく面白き節々いと多く。これを惟家中に祕し置かれんこと中〳〵あらた業なり。因て件の草稿は弊院に申受けて漸次に刊行し江湖同好の看客に紹介せんと欲す」と。妾これを聽きて驚くこと大方ならず。其はよしなき事なり元来世に公にせんとてものしたるにあらず。徒然のあまり文作る稽古の一助にもとてせしなれば。あはれ其事ばかりは免し給はれと固く辞みたれども主人は更にも聞き入れ給はず。是非にとて再三再四迫られぬれば。竟に其の詞に任せ原書は抱甕先生の編輯なるを以て。名をも抱甕文庫を題し一篇より十篇までを刊行することはしたり。繙譯の拙くして原書の意に適はぬふし〳〵あるは免れぬところにしあれば。冀くは大方の諸彦譯者の薄才淺學を憐み、其誤謬の指摘すべきものは教正を垂れて益を後進に與へ給はんことを。記して是が序と爲すと云爾。

明治卅一年四月帝都の北陬・礫川の邊なる茅屋に於て

菊の家女史識

【十一】拙稿「近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容について――明治時代から大正時代までの翻訳事業を中心として――」『国際文化研究科論集』（一四、二〇〇六年）参照。

【十二】『中華全国中日実業家興信録（上海の部・昭和一一年版）』（上海興信所、一九三六年）一八一頁、及び『新聞総覧（昭和一二年）』（日本電報通信社、一九三七年）五一〇頁には、宮地貫道は「上海日日新聞社社長」とあり、『支那在留邦人人名録（第一四版）』（金風社、一九二三年）一二一頁には「上海日日新聞社社主」とある。

【十三】『明治・大正・昭和前期雑誌記事索引集成　社会科学編（別巻2―5）』（皓星社、一九九八年）二一五二頁にある「宮地貫道」の項目参照。

【十四】『支那在留邦人人名録（八版）』（金風社、一九一七年）上海在留邦人名簿索引欄にも井上紅梅は「井上進（上海日日新聞）」と記載されている。

【十五】紅梅「魯迅年譜」（『魯迅全集』改造社、一九三二年）五一一頁参照。

【十六】井上紅梅訳『今古奇觀』（清水書店、一九四二年）参照。

【十七】掲載された翻訳は以下の通りである。

①「支那浦島・李清の話」（『醒世恒言』巻三八）一九三九年三月号

②「知事殿が鯉になった話」（『醒世恒言』巻二六）一九三九年九月号

③「王安石の涙」（『警世通言』巻四）一九四〇年六月号

④「白蛇伝」（『警世通言』巻二七）一九四一年四月号

⑤「唐伯虎の美人画」（『今古奇觀』巻三三）一九四一年七月号

⑥「酒仙李太白」（『今古奇觀』巻六）一九四一年一〇月号

⑦「続・酒仙李太白」（『今古奇觀』巻六）一九四一年一二月号

【十八】掲載された翻訳は以下の通りである。

①「薄情郎」（『今古奇觀』巻三二「金玉奴棒打薄情郎」）【十四】一九二六年四月一日～一七日

②「蝴蝶夢」（『今古奇觀』巻二〇「荘子休鼓盆成大道」）【十五】一九二六年四月一八日～二五日

③「移花接木」（『今古奇觀』巻三四「女秀才移花接木」）【十六】一九二六年五月二七日～七月二日

④「鴛鴦譜」（『今古奇觀』巻二八「喬太守亂點鴛鴦譜」）【十七】一九二六年七月一八日～八月一〇日

⑤「義還原配」（『今古奇觀』巻四「裴晉公義還原配」）【十八】一九二六年八

月一九日～八月二八日

⑥「孝女蔵児」（『今古奇觀』巻三〇「念親恩孝藏兒」）【十九】一九二六年八月二九日～九月二四日

【十九】宇佐美延枝「自序」『抱甕文庫』（哲学書院、一八九八年）七頁参照。

【二十】佐藤春夫「上々吉」（『苦楽』五巻七～一〇号、一九二六年）。

【二十一】鈴木真海『鴛鴦譜（外三種）』（支那文献刊行会、一九二五年）。

【二十二】拙稿「近代日本における白話小説の翻訳文体について――「三言」の事例を中心に」『続「訓読」論――東アジア漢文世界の形成』（勉誠出版、二〇一〇年）、同「中国通俗文芸受容史における翻訳文体の問題について――佐藤春夫の「百花村物語」を中心として」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』（燎原書店、二〇〇八年）参照。

附記・本校脱稿後に里見日本文化学研究所所長　金子宗徳氏より宇佐美延枝に関する貴重な示教を得た。詳細は次稿にて紹介することとしたい。